

## ◆地域活動

# ヒトエグサ遊走子放出期調査 (ヒトエグサ養殖指導)

水産海洋技術センター 大城信弘

### 1. 背景・目的

ヒトエグサの収穫は、遊走子の放出時を避けて行われるのが一般的である。その点での収穫時期の問い合わせが多々あり、遊走子の放出期調査を行った。

### 2. 方法及び結果

天然、或いは養殖網から採取したヒトエグサを、容器に止水で保持し、光の来る側の水表面容器壁際液をスポイトで0.5ml程度時計皿に採取し、100倍視野の顕微鏡下で、大きさや、動きからヒトエグサと思われる遊走子を観察した。

藻体には、アオノリ等の雑物も混じり、それらの大きな物は取り除いたが、細かなのはそのまま使用した。

当初、14年4月9日～6月2日までは、不定期に採取したが、14年12月3日以降、15年3月31日迄は、数日を除き、ほぼ毎日採取した。

14年4月9日、11日、15日は10のガラスビーカーに50g程度の藻体を収容したが、4月22日以降は80容量のPET製果実酒瓶を用い、4月22日～25日迄は約100gの藻体を、4月27日、29日は約50gを、5月29日～6月2日迄は約10gを用いた。遊走子は、主に採取翌日の出具合を観察した。

12月以降も、0.5lや1lのガラスビーカー、4lや8lのPET製果実酒瓶を用い、8g～30g程度の藻体を使用した。12月の観察は一週間程度継続し、場合に依っては途中で液換えを行ったが、多くは

そのまま使用した。

結果は表1～5に示した。遊走子は4月から6月の観察では、5月27日と31日は極めて少ないが、他は殆ど毎回観察された。

12月は名護市仲尾地先を中心に、大宜味村塩屋、金武町福花、うるま市田場地先等の天然物を採取したが、遊走子が観られなかったのは、12月9日と24日の仲尾採取のみであった。

1月は、波の荒い場所として、大宜味村津波地先の護岸から採取した。1月5日、6日、8日、9日の4日間は、採取は行えなかったが、採取された日では、10日から14日の間は、遊走子が観られ無いか、僅かで、26日、27日も僅かで有った。他は、遊走子の出は多かった。

1月14日は、各地の比較の為、大宜味村津波、名護市屋我、今帰仁村古宇利、本部町備瀬、恩納村屋潟、金武町福花の6地点から採取した。

これらは採取当日と、翌日は遊走子はず、3日目から5日目に掛け多量の出が観られた。

2月は、波の穏やかな地区として、羽地内海の屋我地先の養殖網と天然物を併せて採取したが、8日、9日は遊走子が観られなにか僅かであった。又、11日から14日に掛けてと、23日と24日は遊走子が出ないか、僅かで、他は遊走子の出は多かった。

3月は、屋我地先の養殖網と天然物を合わせて採取したが、11日、12日は、採取しなかった。5日、10日、14日は遊走子の出が僅かで、それ以外は多かった。



図1 12月22日仲尾海岸の状況



図4 窓際の容器設置状況



図2 1月18日津波海岸の状況



図5 8ℓ果実酒瓶の設置状況



図3 3月6日屋我地区の状況



図6 多量に出た容器壁面の遊走子

### 3. 考察

同じ藻体を数日間観察し、多くは数日後には、遊走子が出なくなっているが、これは収容容器の液が悪化し、藻体が弱った事によるものと思われる。

藻体は、主に出勤時の朝に採取し、午前9時前後に遊走子を観察したが、遊走子は明るくなると放出されるので、採取時に水に浸かっていると、既に放出される遊走子が減っている可能性が高い。又、雨の日も同様である。

その為、初日の放出遊走子量は、実際は観察より多かったものと考えられる。

サンプルには、アオノリ等の雑藻が極僅かに混じる場合があり、活発に動く遊走子の100倍視野の検鏡では、これらの遊走子と区別する事は困難である。

表中の極少や少にはこれらが含まれる可能性もあるが、用いた藻体の量から、十分に出た中以降は、殆どがヒトエグサの遊走子と考えられる。

潮時と遊走子量との関係を観ると、12月6日、1月5日、2月4日、3月6日は満月で、12月22日、1月20日、2月19日、3月20日は新月と成っているが、連続して観察された12月は、殆ど毎日出ており、潮による差は明瞭では無い。

しかし、1月と2月は、小潮時に出ない傾向にあり、それも満月から新月に向かう小潮に、その傾向が強い。

3月は欠測があり、明瞭では無いが、前半の小潮時の出は少なく、後半はほぼ毎日出ている。

これからすると、1月から3月の収穫期に行われている、小潮時の収穫は理に叶ったものと言える。

但し、場所により、網により遊走子の出は異なるので、従前通りに、現場の藻体の状態を観て、感触等で確認するのが無難である。

これまで、ヒトエグサの遊走子を得るのに、乾燥処理や暗処理が行われているが、今回はこれらの処理を行わずとも、容易に遊走子を得る事が出来た。

成熟した遊走子は、特には手を加えなくても放出され、遊走子の出は単にタイミングの問題と思われる。

それも、小潮時の一時期を除けば、量の多寡はあれ、12月から消滅時期まで、ほぼ毎日出ており、漁業者自ら遊走子を得る事も容易と思われる。

今回は、収穫期の把握を目的としたので、多数の葉片を用いた集団の観察で、一藻体の遊走子放出を観たものでは無い。

今後、より厳密に遊走子放出状況を明らかにするには、一葉体での経過観察が必要とされる。





